

英語教科書が英詩受容に果たした役割

—明治期の輸入英語教科書と英語教科書を中心に—

齋藤晴恵*

The Role of the English Textbooks for the Reception of the English Poems :
Analysis of the English Textbooks in Meiji Era

Harue SAITO

抄録

筆者は、わが国における英詩の受容を明らかにするために、明治期に使用された英語教科書の内容を分析した。明治期の英語教科書に着目した理由は、これらが当時の日本人に英詩を紹介する上で、情報メディアの役割を果たすものとして考えられるからである。当時の英語教科書は、明治初期には米国からの輸入教科書が中心であり、その後、国内で編纂されるようになった。旧制中学校や、筑波大学の前身である東京高等師範学校をはじめとする教員養成機関、英語学校、旧制大学などでも使われおり、英詩の翻訳者として活躍する人々もこれらの英語教科書を通して英語を学習しているものと考えられる。このような理由から明治期の英語教科書は、わが国に最初に紹介された英詩の起点の一つとして検討に値すると思われる。明治期の英語教科書の内容分析の結果、全ての英語教科書に英詩が教材として扱われているのではないこと、輸入英語教科書と日本で編纂された英語教科書には、共通して扱われている詩人および英詩があることが明らかになった。このことから、明治期における英詩の受容という観点においては、少なくとも輸入英語教科書と日本で編纂された英語教科書とに共通して出現した詩人や英詩については、英語学習者や英語科教員たちの間では受容されていたものと考えられる。英語教科書に出現した詩人や英詩を明らかにすることは、わが国における英詩の受容や翻訳詩との関係性を見出すことについて多くの示唆が得られるものと考えられる。

Abstract

The author analyzed textbooks of English which were used mainly in the Meiji Era in order to study the process of the reception of English poems by the Japanese. The textbooks were imported from the United States at the beginning of the Meiji Era. Later in the Meiji Era, in 1889, the English textbooks were edited by the Japanese. The textbooks were used mainly in the middle schools (Kyusei-Chugakko) and the higher normal school (Koto-Shihan Gakko, e.g., Tokyo Higher Normal School, the precedent to the University of Tsukuba), the English language schools and the universities. The translators who published English poems into Japanese in the Meiji Era learned English from those institutions. They also studied English with the textbooks analyzed in this study. The findings are as follows. : Not all of the English textbooks contained poems as teaching materials. Both the imported English textbooks and the edited English textbooks contained the same poets and titles. This affirms that the poets and poems which appeared frequently in the English textbooks were received by the Japanese students and the teachers during the Meiji Era. This study will assist in finding the relationships between the reception of English poems and the translated poems in Japan.

* 筑波大学大学院図書館情報メディア研究科博士後期課程
Doctoral Program
Graduate School of Library, Information and Media Studies,
University of Tsukuba

1. はじめに

1.1 研究の背景

現在の高等学校で使われている英語教科書においては、文学的教材が減る中、特に英詩の採録の減少が著しい。吉武(1964)や濱口(2003)らは、その背景には、英詩と受験英語との間に関係性のないことがあると指摘している。確かに濱口(2003)の言うように、William Wordsworthの‘Daffodils’や‘Rainbow’のように今日でも英語教科書中に見られるものがある一方で、英語教授者が受験英語とは無縁だという功利的な理由から授業の中で英詩を扱わない傾向にあり、その結果、今日の英語学習者の英詩への接点が減る傾向にあることは否めない。しかし、英語学習者にとっては、英語教科書で扱われる英詩が、最初に接する英詩であり、その観点においては、英語教科書は英語学習者に英詩を伝達する重要なメディアとして考えられる。

筆者は、明治期における英詩の受容を明らかにするために、英詩を当時の日本人に紹介する上での情報メディアとして、明治期に使われた英語教科書に着目した。まず、英詩がわが国に紹介され、鑑賞され、さらに翻訳詩としてより多くの人々に受容されていく過程において、最初にわが国に紹介された原詩の基点の一つとして英語教科書を位置付けることができると考えたからである。

わが国に海外の詩人の存在を紹介したものに、明治4(1871)年に中村正直が翻訳したサミュエル・スマイルズ(Samuel Smiles)の『西国立志篇』がある。これは詩人の紹介に終始し、個々の作品は取り上げられていない。筆者は、当時の英語学習者が使った英語教科書中に教材としてすでに英詩が採録されていれば、それが当時の日本人にとっての最初の英詩という情報として扱うことができると考える。

明治期以降、翻訳者たちが翻訳詩を発表し、翻訳詩は人々に吟じられ、作家たちに創作の刺戟を与え、文学者たちを海外文学の研究へと導いたことは周知である。それぞれの詩人の翻訳詩集が出版される以前には、雑誌や新聞に詩人の作品の一篇あるいは数篇が紹介される時代が続いた。明治期の翻訳者たちは、その出身地や出身校も様々である。当時の英詩詩集の流通事情を知るために、英詩翻訳者の用いた英詩詩集を調べようとしても、大正時代の関東大震災や、昭和時代の第二次世界大戦の戦禍などにより現物を確認することが難しい。しかし、当時使用された英語教科書は、幸いにも英語教育史上、重要な歴史史料と見なされ、名著として普及していたも

のは復刻され、確認が可能である。これらは、当時、読本として広く使われており、編者の名前から、『ウィルソン読本』、『サンデル氏ユニオン読本』などと呼ばれて親しまれていた。明治期の英語教科書に関する研究においては、この復刻教科書を用いて内容分析が行われている。

明治期の英語教科書にも英詩が採録されているが、改稿が及ぶことはなく、難解な語彙や表現方法があっても原詩のまま採録されている。このことから、本研究において英詩をわが国に伝達する最初の情報メディアとして、明治期の英語教科書を扱うことは妥当であるものと考えられる。

1.2 研究の目的

わが国における外国詩受容については、いつ、なにが、誰によって、どのように翻訳されたかを明らかにすることが有用であると考えられてきた。先行研究においては、明治期以降に翻訳された英詩(注1)やフランス詩(注2)について、それらを明らかにすることを通して、翻訳詩史や外国詩受容史を現わせるものと考えられてきた。しかし、そこで示された書誌的事柄は、事実に過ぎず、それらは、そのような翻訳が行われるに至った背景を導き出すには及ばないものと考えられる。また、当時用いられた入門的な文学読本の中に出現した作家名や翻訳詩を調査した研究はあるが、網羅的な書誌調査が行われておらず、恣意的ではないかと思われる。けれども翻訳者が原詩をどのように知るに至ったのか。翻訳者が翻訳の際、どのような資料を用いたのか。それらを明らかにすることは重要な問題であると考えられる。しかし、100年以上も前の現在では無名になった人々が用いた資料を確認することは困難である。そこで、当時の人々と原詩とを結びつける手がかりとして、筆者は当時使われていた英語教科書の存在に着目した。多くの翻訳者たちがそれぞれの翻訳において参照したと思われる原書を特定することは困難であるが、当時の人々が英語を学習する過程において、使用した英語教科書の中に英詩を見つけることは、可能である。明治期に使用された英語教科書の内容を分析することを通して、当時の英語学習者がどのような英詩にすでに親しんでいたのかを明らかにすることができると思う。これを明らかにしようと思ったのは、当時の人々が英語学習を通して直接英詩と対峙し、鑑賞し、さらにこの中から自ら英詩を翻訳しようとする人々が出現していくだろうという過程が、翻訳詩の生産において存在するのではないかと考えたからである。また、この検証は、翻訳詩の原本を知るとい

だけでなく、当時の人々の英詩の理解や鑑賞の段階を知るといふ観点からも、重要であると考え。本研究が翻訳詩史研究の構想の中で、当時の人々の英詩理解の過程を明らかにすることができれば、原詩と翻訳者との関係へと研究を進める上での一助となることを期待するものである。

1.3 研究の方法

明治期に、どのような英語教科書が使用されていたのかについては、学校ごとに状況が異なり、本研究のための予備調査として、当時使われた英語教科書について全国的な調査を行なうことは困難である。そのため、本研究では、英語学習者に親しまれた英語教科書の名著として復刻された、高梨健吉・出来成訓監修による『英語教科書名著選集全30巻』で扱われている英語教科書の中から、明治期に使用されたものを選び、その内容の調査、分析を行なった。『英語教科書名著選集』には明治期に使用された英語教科書31点が採録されている。この全集の刊行にあたり書かれた高梨の「英語教科書の復刻について」(注3)によると、明治10年代後半の米沢地方の中学校の事例が示されており、そこでは、入学当初の半年で英語のスプリングの手ほどきがあり、それから英語の原書に取り組みさせている。中学校では学校が教科書を所有しており、それを生徒が借用する形式をとっていた。英和辞書は簡便なものが出版されていたが、そのような英和辞書を所有する生徒は数名に過ぎなかったという。中学校の生徒たちが取り組む英語の原書とは、『Parley's Universal History (パーレーの万国史)』や『Mitchell's New School Geography (ミッチェルの万国地理)』などであった。明治初期には教科書は舶来のもので使用していたことから、英語教科書の範疇には、これらの『Parley's Universal History』や『Mitchell's New School Geography』のような歴史教科書や地理教科書も含まれていた。本研究の、英詩の分析という目的からは、このような英語で書かれた歴史教科書や地理教科書は妥当ではないと判断し、実際に調査のために使用した英語教科書は、表1に示した29点である。表1は、調査した英語教科書の出版年順に配列しており、本論文中の論述における英語教科書タイトルと一致するように便宜上、本表には番号を付与している。

つぎに、表1の英語教科書の中に英詩が扱われているものの有無を調べた。

2. わが国の近代化と教育

2.1 わが国の近代化と英語教育

わが国の英語教育は、文化5(1808)年、長崎の英国艦フェートン号事件を契機として、その翌年、文化6(1809)年に江戸幕府が国防の目的から長崎の通詞にオランダ人から英語を学ぶことを命じたことから始まる。長い期間、鎖国政策を続けてきた日本も、嘉永6(1854)年のペリーの浦賀への来航、文久2(1862)年の生麦事件、文久3(1863)年の薩英戦争、文久4(1864)年の四国艦隊の下関上陸などによる西欧諸国の出現と薩摩藩や長州藩の西欧との武力衝突の敗北を通して、西欧の文明に大きな衝撃を受け、これらの事件の後、薩摩藩や長州藩をはじめとする各藩は西欧へと続々と留学生を送り出した。それらの代表的な人物には、森有礼(薩摩藩)、伊藤博文・井上馨(長州藩)などがある。明治維新後、廃藩置県を行ない、明治4(1871)年には明治政府は岩倉具視を全権とする欧米使節団を派遣し、西欧をモデルとする国家の近代化を邁進していく。近代国家を確立するためには、西欧からの情報入手が必要だと考えられたからである。

わが国の近代化の魁は、軍隊であり、行進には洋服の軍服、靴、帽子を着用し、西洋音楽の行進曲が採用された。軍事訓練には、海外から顧問を招聘し、外国軍隊の兵法の学習や、兵器を扱う説明書を理解するための外国語教育や西洋史などを担当した。このような外国人教師は、帝国大学にも招聘されている。このように日本の近代化の推進力となったものとして外国人教師や、各藩から送られた留学生、欧米使節団などの力が大きい。

さらに、西欧に関するあらゆる情報を入手するために翻訳を行なう。この翻訳は、軍事関係、火薬や染料に関する化学分野、『万国公法』などの法律、西洋事情一般に及ぶ。

明治5(1872)年の「学制」発布によってわが国における近代学校制度が全国規模ではじまる。「学制」発布とともに師範学校が設置され、ここで学制に基づく小学校の新教科書が編集され、全国に普及していく。明治12(1879)年の「教育令」の制定で中学校に教科として外国語学(英語、独語、仏語)が置かれた。この頃の英語科教育は、英語を身につけることによって西欧の文物や思想を取り入れ、日本の後進性を解消し、一日も早く西欧諸国と対等の独立国になりたいというような国家的願望を実現させるための英語学習であった。そして、国のために英語を学ぶということは、そのまま個人の立身出世にも繋がることであり、このことから当時の英語熱は

表 1 明治期に使用された英語教科書の英詩収載状況

	教科書名	発行者	発行年
1	Wilson's Readers The First Reader	Harper & Brothers	万延 1 (1860) 年
2	Wilson's Readers The Second Reader	Harper & Brothers	万延 1 (1860) 年
3	Union Readers	Iverson, Blakeman, Taylor & Co.	明治 16 (1883) 年
4	National Readers 1	A. S. Barnes & Co.	明治 16 (1883) 年
5	National Readers 2	A. S. Barnes & Co.	明治 16 (1883) 年
6	National Readers 3	A. S. Barnes & Co.	明治 17 (1884) 年
7	National Readers 4	A. S. Barnes & Co.	明治 17 (1884) 年
8	National Readers 5	A. S. Barnes & Co.	明治 17 (1884) 年
9	English Readers: The High School Series 1	文部省編輯局	明治 20 (1887) 年
10	English Readers: The High School Series 2	文部省編輯局	明治 20 (1887) 年
11	English Readers: The High School Series 3	文部省編輯局	明治 20 (1887) 年
12	English Readers: The High School Series 4	文部省編輯局	明治 20 (1887) 年
13	English Readers: The High School Series 5	文部省編輯局	明治 20 (1887) 年
14	English Readers: The High School Series 6	文部省編輯局	明治 20 (1887) 年
15	正則文部省英語読本 1	文部省編輯局	明治 22 (1889) 年
16	正則文部省英語読本 2	文部省編輯局	明治 22 (1889) 年
17	正則文部省英語読本 3	文部省編輯局	明治 22 (1889) 年
18	正則文部省英語読本 4	文部省編輯局	明治 22 (1889) 年
19	正則文部省英語読本 5	文部省編輯局	明治 22 (1889) 年
20	The Globe Readers 1	大日本図書	明治 40 (1907) 年
21	The Globe Readers 2	大日本図書	明治 40 (1907) 年
22	The Globe Readers 3	大日本図書	明治 40 (1907) 年
23	The Globe Readers 4	大日本図書	明治 41 (1908) 年
24	The Globe Readers 5	大日本図書	明治 41 (1908) 年
25	New English Drill Books 1	開成館	明治 40 (1907) 年
26	New English Drill Books 2	開成館	明治 40 (1907) 年
27	New English Drill Books 3	開成館	明治 40 (1907) 年
28	New English Drill Books 4	開成館	明治 40 (1907) 年
29	New English Drill Books 5	開成館	明治 40 (1907) 年

高まるばかりであったが、やがて、ただ時流に任せて英語を学ぶ者や、西欧文明に心酔する者も目立ってくるようになった。¹

このように近代化政策の中で英語教育の実用的価値を重視する風潮も見られるものの、わが国の外国語教育の目的は、明治期の教育政策から現行の「学習指導要領」に至るまで、実用的価値と教育的価値を重視したものである。外国語科の目的を、明治34(1901)年の「中学校令施行規則」では、外国語を理解し、運用し、知識の増進に資するための英語運用力の育成であるとしている。このように外国語の理解力・発表力を養成し、外国語の学習を通して外国文化を理解すること、という外国語教育の目的は、明治期にすでに掲げられていた。

2.2 明治期の英語教科書

わが国の英語教育においては、明治初期に使われた英語教科書の多くがアメリカからの輸入教科書である。日本人が英語教科書を編纂するようになったのは文部省編輯局が森有礼により、高等学校の学生向けにウォルター・デニング(Walter Denning)が編纂した『English Readers(全6巻)』を出版した明治20(1887)年以降になる。当時の英語教科書は、旧制中学校や、筑波大学の前身である東京師範学校をはじめとする教員養成機関や英語学校、旧制帝国大学などでも使われている。明治政府は、明治5(1872)年、「学制」発布と同時に筑波大学の前身である「東京師範学校」を創設し、その後全国に作られる「小学校」の教員を養成するための各地の「師範学校」での教員養成を行なうための人材養成に着手した。明治8(1875)年には、「中学師範学科」が「東京師範学校」に設置され、中学校教員の養成が開始された。²この「中学師範学科」は、札幌農学校のように、英語で授業が行われる教育機関であり、教授陣には、アメリカ人のM.M.スコットや、アメリカの師範学校に留学した井澤修二や高嶺秀夫らがいる。政府の近代化政策の中での教育に関わる人材育成機関であることから、学費が全額支給されることもあり、私立の英語学校で時代の機運を掴もうという英語学習者たちが「中学師範学科」の応募に殺到したとされる。明治19(1886)年、「学校令」公布があり、「東京師範学校」は、「東京高等師範学校」となり、尋常師範学校を卒業した初等学校の教員経験者を中学校教員として養成することになった。その後、明治32(1899)年に「学校令」改正があり、ここで日本の教育制度は、小学校(尋常, 高等), 中学校, 高等学校大学予科, 尋常師範学校, 高等師範学校, 帝国大学として整備されるにいたったのである。明治27(1894)

年、「東京高等師範学校」に「英語専修科」が設置され、これにより官立で国内唯一の英語教員養成機関となった。明治32(1899)年に開始された教員検定制により、「英語専修科」卒業生には無条件で英語教員免許が交付された。筑波大学の歴史は、日本英語教育史と密接であり一体でもある。

明治20年代には、米国で出版された輸入英語教科書の翻刻版が出回る時代になる。明治20(1887)年には、国内で編集された英語教科書として、デニングによって編集され、文部省編輯局から『English Readers. The High School Series. Book I. (9), Book II. (10), Book III. (11), Book IV. (12), Book V. (13), Book VI. (14)』が出版された。これに明治31(1898)年に出版された文部省編『正則文部省英語読本1(15), 2(16), 3(17), 4(18), 5(19)』や、明治41(1908)年に出版された岡倉由三郎編『The Globe Readers 1(20), The Globe Readers 2(21), The Globe Readers 3(22), The Globe Readers 4(23), The Globe Readers 5(24)』の英語教科書などが続く。

2.3 明治期の英語科教育における英詩教授法

前述の通り、今日の英語教育において文学的教材としての詩は軽視されている。明治期の英語教育においては、少なくとも今日のような扱いではなかったことを、明治初期にわが国の近代化を推進するために、明治政府が招聘したお雇い外国人教師の英語授業の記録を通して知ることができる。お雇い外国人教師の一人として明治6(1873)年に来日したジェームス・サマーズ(James Sommers)の、明治13(1880)年から明治15(1882)年まで札幌農学校に英語学教授として赴任した時の生徒が当時のサマーズの授業について次のように記している。

「十一月十七日 木 雪 『サンマース』氏ト事アリ、
『グレー』ノ『エレジー』ヲ同氏ノ教授ニテ始ム」³

また、亀井秀雄の『日記』解説には、

「『エレジー』に親しむきっかけを与えたのがJ・サマーズだったことは、一四年一月一七日の『日記』によって推定できる。」⁴

「かれは週に一時間を朗読に充て、英文学の古典から適当なものを選んで暗唱させた。『エレジー』はその一つだったのであろう。」⁵

さらに、亀井は、開成学校の明治九年のサマーズの出題したグレーの「エレジー」に関する試験問題を示した上で、札幌農学校の英詩の授業について次のように論じている。

「札幌農学校の試験の記録はないが、そう大きく変わらなかったとすれば、学生は暗唱を求められるとともに、内容を把握してパラフレーズできるだけの理解と作文力を身につけさせられたのである。」⁶

これらの記述から、当時のお雇い外国人教師の英語教授法では、学生たちは英詩を何度も繰り返し暗誦させられていたことがうかがえる。

英米文学に関する日本で最初の教科書は、アンダーウッド (Underwood) の『A Handbook of English Literature (1871, 1872)』と言われており、サマーズは、東京大学の前身である開成学校においては、明治6 (1873) 年からこの教科書を使っている。

サマーズの英語教授法に見られるように、グレーの英詩をひたすら生徒に暗唱させることは、どのような意義があるのだろうか。英詩に英語教授者がまず啓発されることは、英語教授者としての人間形成においても大切なことだと考えられる。自身が感銘した詩を教授することを通して、英語学習者の人間性の育成にもつながると考えられるからである。英語教科書を教授する上では、そこに採録されている教材は、西洋思想や詩、西洋文化のエッセンスであり、英語教授者は、それぞれを教える際には、哲学者、詩人、海外事情を十分に理解している素養が求められるものと考えられる。ここから、当時の英語教科書においては、英詩の学習は軽視されていたと考えられるのではなく、鑑賞し、人生の折々に思いだし、吟唱するという、文学教材としてあるべき詩本来の学習の重要性を十分に理解していたのではないかと考えられる。これは、英語学習がそれまでの英語で書かれた教科書を用いて、英語科以外の学問領域をも学習するという英学の時代から、政府の近代化政策のなかで英語を実社会でも活用できるよう求められていく時代へと変化していく社会の中で、実学重視に傾きがちな当時の風潮に対し、お雇い外国人教師らが、詩本来のあるべき姿を伝えたかったのではないかと考えられる。

3. 先行研究における英語教科書の分析調査

3.1 英語教授法研究における英語教科書分析調査

英語教科書発達史について、従来の主観的な手法では

なく、体系的な教科書発達史の研究法を確立する目的で中村 (2002) は明治から現代までの教科書をデータベース化し、語彙数や特定の文法規則の使用頻度、文章の難易度などを中心に量的分析を行なっている。しかし、中村の研究からは、教材として扱われた英詩に関するデータは得られていない。

3.2 日本近代児童文学研究における英語教科書分析調査

近代児童文学研究においては、『ローマ字雑誌』や『女学雑誌』に発表されたアンデルセン童話の『マッチ売りの少女』や『皇帝の新衣裳』の翻訳が、原書からの翻訳ではなく、明治期に使われた英語教科書『ニュー・ナショナル・リーダー』からの重訳であったことが発見された⁷ことから、英語教科書を通して西洋童話に心動かされたのは生徒だけでなく、『ローマ字雑誌』や『女学雑誌』に関わった人々でもあり、川戸 (2000) は、「われわれは、日本の近代児童文学の歴史に最初の一歩を刻むことになったアンデルセンやグリムの翻訳に、さらにはその翻訳誕生の重要なきっかけを作った『ナショナル読本』をはじめとする外来の英語教科書に、これまで以上に大きな関心を寄せてみなければならないだろう。」と、明治期に使われた英語教科書の重要性を認めている。⁸また、尾崎も同様の認識から、『ニュー・ナショナル・リーダー』や『正則文部省英語読本』などを分析する研究を行っている。

3.3 訳註詩集編纂における英詩の分析

昭和13 (1938) 年、有海久門が『リーダーに現れたる英詩の研究』(有朋堂) を出版している。その自序には、「この小著は別記調査の如く現行五十餘種の中等学校英語読本に現れた英詩の統計により、採用回数の多い詩 (詩家28氏、詩46篇) を材料として編れた (ママ) ものである。教壇に於ける英詩の取扱方に主眼を置き、芸術的に又語学的に英詩を研究せんとするものである。」と書かれている。有海は、大正3 (1914) 年の鈴木富太郎著『Suzuki's Education Readers』から、昭和12 (1937) 年に出版された神保格・トマス著『Girls Sunshine Readers』に至るまでの55種類の中学校英語教科書を用いて、そこに採録されている英詩を分析している。この調査の目的は、英語教科書に採録された詩人および英詩の傾向を把握し、そこに現れた出現頻度の高いものを選び、訳註詩集を編纂しようという意図からである。

その結果について、有海は、「教科書に採用された詩は芸術的には概して第二義的なもの、即ちextrinsicなも

のが多いとはいはれるが、別記調査の結果に見る如く、近頃ではさう（ママ）一概に断言することは許されない。」と考察している。⁹この調査の結果を生かしたうえで、有海は自らが編纂した英詩の訳註書の内容を童謡篇と詩篇とに別けている。さらに、一篇の詩毎に註をつけ、初学者も容易に英語を学び得るような英詩註釈書をまとめている。英詩註釈書は、数多くこれまで出版されているが、そこでの詩の採録は編者の意図によるところが大きい。英語教科書における出現頻度から英詩の採録を行うことで、詩集の編纂者として中立の立場を保てると思ったのだろうか。

このような理由から、有海の大正から昭和初頭の英語教科書における詩の分析は、英詩註釈書編集において再録する詩を選択する目的で行われおり、本稿における研究の目的とするものとは異なる。

さらに、本稿で扱う英語教科書の調査対象が、明治期に使用された輸入英語教科書と国内で編纂された英語教科書であることから、調査対象となる時期が有海の大正から昭和初頭の英語教科書を対象とするものとは異なる。しかし、本研究での調査結果と有海の調査結果とを照合し、さらに分析をすすめていくことから、明治から大正、昭和初頭までの英語教科書に収載された英詩の概要を理解することができるだろう。

3.4 アメリカ文学研究における英語教科書分析

佐渡谷 (1977) は、米文学研究の立場から、アメリカ詩人について英語教科書を用いた作家研究を行なっている。佐渡谷は、ブライアント、ロングフェロー、ホイットィア、ポー、ホイットマンなどの詩人を扱っているが、調査した英語教科書の範囲は、明治期に使用された英語教科書として『ユニオン第四讀本』、『ニュー・ナショナル第四讀本』、『ニュー・ナショナル第五讀本』、『スウィントン第四讀本』、『スウィントン第五讀本』、『ロングマン第四讀本』などについて言及しているにとどまる。¹⁰

本稿では、アメリカ詩人ととどまらず、英語教科書で紹介された詩人とその作品を広く調査することを意図している。アメリカ詩人だけでなく、イギリス詩人についても英語教科書を調査分析していくこと通して、英詩人と呼ばれるより広い範囲での調査を行い、佐渡谷の用いた英語教科書の範囲を広げることが、本稿では求められていると考える。

4. 輸入英語教科書と日本で編纂された英語教科書の中に見られる英詩

4.1 明治期の英語教科書に見られる英詩の採録状況

明治期に使用された英語教科書に収載された英詩の有無を調査した結果、英語教科書には、すべてに英詩が収載されているのではなく、英詩の収載のあるものと、ないものがあることがわかった。これらの英語教科書29点の中で、英紙の収載がみられるものは表2に示した通り22点であった。

Marcus Wilson 著の『Wilson's Readers (1), (2)』は、表題紙によると「The First Reader of the School and Family Series (1)」, 「The Second Reader of the School and Family Series (2)」で、1860年にNew Yorkで出版されている。

『The First Reader of the School and Family Series (1)』には原作者名はみられないが、英詩の収載は12篇である。内容は、子どものための宗教への理解を目的とするものが多いと考えられる。具体的には、'A Child's Morning Prayer', 'Thou God Seest Me', 'A Child's Evening Prayer' (同タイトル2篇), 'Christ Blessing Children', 'God Made All Things', 'God is Ever Good'などで、毎日の生活の中にいつもキリストの神が身近にいることと朝晩の祈りを短い詩を通してくり返し理解させようという意図がうかがえる。また、小さな水滴も集まると川のような大きな流れとなり、やがて大海に注ぐという教訓的な内容の 'Little Things' や、毎日の生活にあるものや、学習の大切さについて扱っている 'The Clothes we wear' や 'Learning to Read' なども収載されている。

『The Second Reader of the School and Family Series (2)』には一部分のものも含めて27篇の英詩が収載されている。原作者名が記載されているものは2篇であり、それらは Mrs. Gordon 作 'Childhood's Hours' と L. H. Sigournev 作 'Boy and Lark' である。これらの詩は、子どもたちが毎日の生活で接する自然を扱ったもので、同様のテーマのものには、'The Robin's Temperance Song', 'Winter Scenes', 'What is Earth?', 'Don't Kill the Birds', 'The World is Full of Beauty' などがある。今日でも「キラキラ星」として親しまれている 'Twinkle, Little Star' がここでは扱われている。(1)と同様に、神や 'I'll Never Use Tobacco', 'Early Rising' などという教訓を扱うものもみられる。

Charles Walton Sanders 著の『Union Readers (3)』は、表題紙によると「Sanders' Union Fourth Reader: Em-

表 2 明治期に使用された英語教科書の英詩収載状況

	教科書名	発行者	発行年	英詩収載
1	Wilson's Readers The First Reader	Harper & Brothers	万延 1 (1860) 年	有
2	Wilson's Readers The Second Reader	Harper & Brothers	万延 1 (1860) 年	有
3	Union Readers	Ivison, Blakeman, Taylor & Co.	文久 3 (1863) 年	有
4	National Readers 1	A. S. Barnes & Co.	明治 16 (1883) 年	有
5	National Readers 2	A. S. Barnes & Co.	明治 16 (1883) 年	有
6	National Readers 3	A. S. Barnes & Co.	明治 17 (1884) 年	有
7	National Readers 4	A. S. Barnes & Co.	明治 17 (1884) 年	有
8	National Readers 5	A. S. Barnes & Co.	明治 17 (1884) 年	有
9	English Readers: The High School Series 1	文部省編輯局	明治 20 (1887) 年	なし
10	English Readers: The High School Series 2	文部省編輯局	明治 20 (1887) 年	なし
11	English Readers: The High School Series 3	文部省編輯局	明治 20 (1887) 年	有
12	English Readers: The High School Series 4	文部省編輯局	明治 20 (1887) 年	有
13	English Readers: The High School Series 5	文部省編輯局	明治 20 (1887) 年	なし
14	English Readers: The High School Series 6	文部省編輯局	明治 20 (1887) 年	有
15	正則文部省英語読本 1	文部省編輯局	明治 22 (1889) 年	なし
16	正則文部省英語読本 2	文部省編輯局	明治 22 (1889) 年	なし
17	正則文部省英語読本 3	文部省編輯局	明治 22 (1889) 年	有
18	正則文部省英語読本 4	文部省編輯局	明治 22 (1889) 年	有
19	正則文部省英語読本 5	文部省編輯局	明治 22 (1889) 年	なし
20	The Globe Readers 1	大日本図書	明治 40 (1907) 年	有
21	The Globe Readers 2	大日本図書	明治 40 (1907) 年	有
22	The Globe Readers 3	大日本図書	明治 40 (1907) 年	有
23	The Globe Readers 4	大日本図書	明治 41 (1908) 年	有
24	The Globe Readers 5	大日本図書	明治 41 (1908) 年	有
25	New English Drill Books 1	開成館	明治 40 (1907) 年	なし
26	New English Drill Books 2	開成館	明治 40 (1907) 年	有
27	New English Drill Books 3	開成館	明治 40 (1907) 年	有
28	New English Drill Books 4	開成館	明治 40 (1907) 年	有
29	New English Drill Books 5	開成館	明治 40 (1907) 年	有

bracing a Full Expositions of the Principles of Rhetorical Readings; with Numerous Exercises for Practice, both in Prose and Poetry, Various in Style, and Carefully Adapted to the Purposes of Teaching in Schools of Every Grade.]とあり、1863年にNew YorkとChicagoのIverson, Blakeman, Taylor & Co.から出版されている。この教科書は、全体的に英詩の比重が非常に高いことに特徴がみられる。英詩はPart Secondに収載されており、全131課の中に70篇の英詩が見られる。原作者名が記述されている英詩タイトルは50篇ある。この中には文中に一部分が記述されたものも含む。収載されている詩には、13歳の少女が書いた‘The Sailor Boy's Song’という少年水夫をテーマに扱う詩も見られる。高名な詩人の作品だけでなく、学習者と同年代の子どもの作品も扱われているものは、調査した英語教科書の中では、ここだけに見られる特徴である。詩の内容は、宗教、自然、教訓ではあるが、原作者が明記されている詩を作品として扱うという観点に加わっていることが重要である。Longfellowの‘Hiawatha's Hunting’やEliza Cookの‘Where There's A Will There's A Way’など、詩を鑑賞し、詩の内容についての質問が各課に付されていることから、新出単語や英文法の学習が主体であった前述の2点(1)、(2)と比較すると、英詩鑑賞に重点があることが本書の特徴だと考えられる。また、『Chambers' Journal』や『Harper's Magazine』、『Home Journal』などの雑誌からそれぞれ1篇ずつ転載されている。

『National Readers』は、表題紙には「Barnes' New National Readers」というシリーズ名で『New National First Reader (4)』(本稿では以降、便宜上National Readers 1 (4)とする)と『National Readers 2 (5)』が1883年にNew YorkとChicagoのA.S.Barnes & Companyから、『National Readers 3 (6)』が1912年にNew York, Cincinnati, ChicagoのAmerican Book Companyから出版されている。(6)にのみ「S.Proctor Thayer, Harlan H. Ballard, Charles J. Barnes」の3名の著者名の記載がみられる。凡例には、出版年を1884年としているが、表題紙裏には、「Copyright 1884 by A.S.Barnes & Co., Copyright 1912 by C.J.Barnes」との記載があり、少なくとも1912年以降に出版されたものを原本としていと考えられる。『National Readers 4 (7)』と『National Readers 5 (8)』は(6)と同じ出版社から出ているが、表題紙裏に「copyright, 1884, by A.S. Barnes & Company」の記述がみられる。

『National Readers 1 (4)』のPart Iには、新出の単語を使用した簡単な詩4篇が、Part IIには、「Pearls in

Verse』として教訓的な短詩が7篇収載されており、本書収載の英詩には、原作者の記述が見られない。‘I have a little kitty’以外は、‘Do your best, your very best’, ‘Little children, love each other.’, ‘Early to bed and early to rise.’, ‘Speak the truth, and speak it ever’, ‘When mother says, ‘Do this’ or ‘that’. などのような教訓的な英詩が目立つのが特徴である。

『National Readers 2 (5)』には、11篇の英詩が見られ、「Pearls in Verse」には9篇の英詩が収載されている。本書にも私たちに馴染み深い‘Twinkle, twinkle, little star.’が収載されている。教訓的な詩は、‘Never Tell a Lie.’, ‘Do Your Best.’, ‘Work while you work, play while you play’として見られ、宗教観も、‘If little things that God has made’の中にあらわれている。子どもをとりまく自然も子猫や野うさぎ、小鳥などの動物をテーマにした詩の中に見られる。

『National Readers 3 (6)』には、17篇の詩が収載されている。その中には、W. H. Lippincottの‘How the Wind Blows!’と‘A Song of the Sleigh’の2篇が収載されており、W. M. Caryの‘The Robin Redbreast’, C. D. Weldonの‘Will and the Bee’, W. St. J. Harperの‘Morna by the Sea’などの子どもの世界を取り巻く自然をテーマにした詩が見られる。

『National Readers 4 (7)』には、21篇の詩が収載されている。その中には、Alfred Tennysonの‘The Brook’やLongfellowの‘The Leap of Roushan Beg’も見られる。これまでに見てきた英語教科書によく見られた宗教色や教訓色がうすくなり、ここでは、歴史的な史実に関する詩の引用が見られる。具体的には、38課に‘Holland’の「A land that rides at anchor, and is moored,/ In which they do not live, but go abroad.」という引用が見られる。また、54課にもByronの‘Wild Horses of South America’が見られる。英語教科書も学習者の学年が上がるにつれて、教科書中にあらわれる詩のテーマの中に宗教色や教訓色が次第に見られなくなってくることは、道徳教育や生活指導という観点が教材内容へ反映されていることとの関係からも重要であると考えられる。

『National Readers 4 (8)』には、68篇の詩が収載されている。内訳は、「Lessons in Verse」として34篇の英詩と、「Gold Dust」として34篇の断片が扱われている。本書の中での詩の扱いについては、詩の学習に重点を置く指導が行われるよう配慮されている。各課では、単語の説明として、詩のタイトルの下に単語とアクセントの位置、単語の意味が示されている。詩本文には著者名が記されている。続いて原作者についての略伝、詩の特

徴, 詩の技法の説明がつづく。34の課を通してこのような詩についての学習が展開されるので, 学習者には詩の鑑賞だけでなく, 詩の技法への理解も深めることができるよう配慮されている。この教科書では, 学習の段階が進むにしたがい, 学習者の詩に取組む姿勢が変化していくと考えることができる。

『English Readers. The High School Series. Book III. (11)』には, Miltonの詩 ‘Moral Courage’ の「Among the faithless, faithful only he;/ Among innumerable false, unmoved,/ Unshaken, unsexed, unterrified,/ His loyalty he kept, his love, his zeal;/」が引用されている。

『English Readers. The High School Series. Book IV (12)』には, Shakespeareの「There is a tide in the affairs of men,/ Which, taken at the flood, leads on to fortune;/ Omitted, all the voyage of their life/ Is bound in shallows and in miseries;/」が引用されている。本書には, 他には作者不詳の ‘Virtue is More to Be Honoured than Power.’ が収載されている。

『English Readers. The High School Series. Book VI. (14)』には, KAJINの ‘OMME AND GENGIRO.’ という日本を題材にした英詩が収載されている。

1889年に出版された『正則文部省英語讀本 (The Monbusho Conversational Readers No.3) (17)』には, 132課に Wordsworthの ‘To The Cockoo’ が1篇収載されており, 次課でその内容を学習するよう意図されている。

『正則文部省英語讀本 (The Monbusho Conversational Readers No.4) (18)』には, 54課に Sir Walter Scottの ‘PATRIOTISM’ が1篇収載されており, 55課でその内容を学習するよう意図されている。このように正則文部省英語讀本には, 英詩の収載が極めて少ないことがわかる。

1908年, 岡倉由三郎著作の『文部省検定済 中学校師範学校外国語科教科用 The Globe Readers. Arranged in Grades』が大日本図書から5巻出版される。『The Globe Readers 1 (20)』, 『The Globe Readers 2 (21)』, 『The Globe Readers 3 (22)』, 『The Globe Readers 4 (23)』, 『The Globe Readers 5 (24)』のそれぞれAppendixには, 英詩が収載されている。

『The Globe Readers 1 (20)』には, 11篇の詩が収載されている。いずれも作者名の記載はなく, 内容も ‘Thirty days has September’ のように, 学習のため書かれた詩であることが特徴である。本書には, 早口言葉として親しまれている, ‘Peter Piper Picked a peck of pickled pepper;’ が見られる。

『The Globe Readers 2 (21)』には, 9篇の詩が収載されている。いずれも「appendix」で扱われている。原作者が記載されたものには, H. G. Adamsの ‘The Slide’ と, Sara Coleridgeの ‘The Year’ が見られる。いずれも, 子どものそり遊びや一年の行事を扱っており, キリスト教的な詩や教訓的な詩は見られない。

『The Globe Readers 3 (22)』には, 6篇の詩が収載されている。いずれも「appendix」で扱われていることは, (21)と同じである。原作者が記述されている詩には, M. A. Stodartの ‘Work while you work, play while you play’, Tennysonの ‘Lullaby’, Longfellowの ‘A Winter Afternoon’, Wordsworthの ‘Written in March’ などが収載されている。Stodartの ‘Work while you work, play while you play’ は, 教訓的な内容であるが, 他の二篇は, 作品としても鑑賞にたえる著名な作品が選ばれている。

『The Globe Readers 4 (23)』には, 7篇の詩が収載されている。これらは本課の中でそれぞれ扱われている。Payneの ‘Home, Sweet Home’, Haganの ‘Onward! Onward!’, H. W. Longfellowの ‘The Windmill’, Henry K. Whiteの ‘The Wandering Boy’, Thomas Campbellの ‘The Soldier's Dream’ などがみられる。いずれも著名な作品が選ばれている。

『The Globe Readers 5 (24)』には, 7篇の詩が収載されている。これらは(23)と同じく本課の中で扱われている。Wordsworthの ‘Fidelity’, Thomas Mooreの ‘The Last Rose of Summer’, Thomas Hoodの ‘A November Fog’, Robert Southeyの ‘The Battle of Blenheim’ などが収載されている。

特筆すべきは, (24)の33課と34課に ‘John Milton.-1. The Poet's Boyhood’, ‘John Milton.-2. The Poet's Boyhood’ と題して詩人伝が紹介されていることである。詩聖ミルトンの幼少時について読み物として扱われている。本研究で調査したその他の英語教科書の中では詩人伝は見られなかった。このように, 英詩を収めている英語教科書においては, 英詩や詩人についての扱いは, それぞれ異なり, 同じシリーズの中にあっても異なっていることが明らかになった。

明治40(1907)年, 熊本謙二郎著作の『文部省検定済/FIRST/ NEW ENGLISH DRILL BOOK/ GRADED ENGLISH LESSONS FOR JAPANESE STUDENTS BY K. KUMAMOTO/ 英語新教本』が開成館から全5巻出版される。

『New English Drill Books 2 (26)』には, 作者名の記述はないが, ‘The Boat Song’ と, ‘Little drops of water,/ Little grains of sand’ の2篇の詩が見られる。

『New English Drill Books 3 (27)』には、作者名の記述はないが、‘Can You Tell My Name?’ が1篇収載されている。

『New English Drill Books 4 (28)』には、「POEMS」として5篇の詩が収載されている。それらは、Dr. Wattsの‘The Rose’、作者不詳の‘The Diamond Ring’、John Howard Payneの‘Home, Sweet Home’、Hanna Flagg Gouldの‘Jack Frost’、Amelia Opieの‘The Orphan Boy’などである。

『New English Drill Books 5 (29)』には、「POEMS」として(28)と同じく5篇の詩が収載されている。それらは、Alfred Tennysonの‘The Charge of the Light Brigade’、Felicia Hemansの‘Casabianca’、Ralph Waldo Emersonの‘The Mountain and the Squirrel’、William Wordsworthの‘To a Butterfly’、Longfellowの‘A Psalm of Life’などである。

日本人が編纂した岡倉と熊本の英語教科書を比較すると、それぞれが5巻のシリーズの構成になってはいるが、英詩の扱いに差異があることが認められた。アメリカで出版された英語教科書における英詩の比重には比較も及ばないが、岡倉よりは熊本の方が、英語教材としての詩の扱いを重視する方針をとっていたものと思われる。

岡倉と熊本のそれぞれが共通して採択している英詩として、John Howard Payneの‘Home, Sweet Home’が選ばれていることは興味深い。なぜなら、この詩は、我が国においては、現在まで「峠の我が家」として人々に愛され、歌い続けられてきたものだからである。

そして、岡倉は、Tennyson, Wordsworth, Longfellow, Thomas Campbell, Thomas Moore, Thomas Hood, Southeyなどの詩人を、熊本は、Tennyson, Hemans, Emerson, Wordsworth, Longfellowなどの詩人を選択して

いる。両者に共通しているのは、Tennyson, Wordsworth, Longfellowの三詩人である。ここから日本人の英詩の嗜好と、英詩の受容を考える上での示唆が得られるものと考えられる。

4.2 明治期の英語教科書に見られる詩人の出現状況

明治期に英語教科書で扱われた詩人とその作品についての概要を知るために、詩人と英詩の出現頻度を調べた。詩人別の22点の英語教科書における英詩人の出現頻度を調べた結果を表3に示す。

多いものから順にLongfellowが16回、ShakespeareとTennysonが6回、HemansとWordsworthが5回、Mackay, Rossetti, Lippincottがそれぞれ4回である。

ここに挙げた明治期の英語教科書中に出現する詩人については、Longfellowが16回と群を抜いて多く教科書に取り上げられていることが明らかになった。これは、輸入教科書が米国で出版されたものであることから、同時代の米詩人という観点から考えると、当然の結果であるとも考えられる。次に多いShakespeareとTennysonは6回である。明治期から坪内逍遙によってShakespeareの戯曲がわが国においても翻訳され、演劇も上演されたりしていることから、当時の人々にとっては海外においても重要な詩人として扱われていることは、当然だと考えられる。Tennysonについては、やはり翻訳作品も多く、わが国においても親しまれている詩人である。

次に多い5回出現しているHemansは、今日までほとんど詩人としての名前や作品について読まれてはいない詩人である。しかし、米国においては、多くの詩集が発行されており、当時読まれていた詩人として、米国の教科書に取り上げられていたものと考えられる。わが国において編集された教科書中にもHemansが扱われている

表3 詩人別収載頻度

詩人名	収載頻度
H. W. Longfellow	16
William Shakespeare Alfred Tennyson	6
Felicia Hemans William Wordsworth	5
Charles Mackay Christine G. Rossetti W. H. Lippincott	4

ことから、当時の日本人にとっても親しみやすい詩として、教科書編集者に考えられたのであろう。その中でも、日本で編集された教科書には、‘Casabianca’が選ばれている。このように明治期においてはHemansが少なくとも知られており、中学校生徒や英語科教員らに読まれていた詩人であったことを知ることは、重要であろう。Hemansの出現頻度の半数でしかないが、Davis, Mackay, Moore, Morris, Opie, Partridge, Procter, Read, Saxe, Sigournev, Whittierなども明治期に読まれた詩人たちであることが明らかになった。これらの詩人たちもHemansと同様、今日ではあまり重きを置いて扱われていない詩人たちであり、なぜ、明治期に多く読まれ、その後、わが国においては読まれなくなっていったのかについては、明治という社会背景とこれらの詩人および作品についての関係をさらに見ていく必要があるかと思われる。

同じく5回のWordsworthについては、我が国においても自然派詩人として今日まで大変よく親しまれている詩人である。扱うテーマには自然が多く、風花水明な日本の風土においてWordsworthの歌う自然について、イメージを描きやすく、親しみがもてたものと思われる。

4.3 明治期の英語教科書に見られる英詩の出現状況

つぎに調査した英詩の採録のある英語教科書における英詩タイトルの出現頻度を表4に示す。

個別の作品タイトルについては、教訓的な作品が多く扱われていたが、今日でも読まれているLongfellowの‘A Psalm of Life’, Mooreの‘The Last Rose of Summer’, Christine G. Rossettiの‘The Wind’, Tennysonの‘The Charge of the Light Brigade’などが上位にあることから、米国の英語教科書で扱われる英詩の傾向と、日本人による編集の英語教科書で扱われる英詩の傾向とがほぼ一致していると考えられるだろう。

英語教科書における英詩タイトルの出現回数については、著名な詩人の作品でないものでも、‘Little drops of water’（作者名記載なし）が4回、‘Do your best, your very best’（作者名記載なし）が3回、Longfellowの‘A Psalm of Life’, Mooreの‘The Last Rose of Summer.’, Christine G. Rossettiの‘The Wind.’, Tennysonの‘The Charge of the Light Brigade.’などのほかに、作者名記載なしの作品として‘Early Rising’, ‘Song of the American Eagle’, ‘Suppose’, ‘The Choice of Trades’, ‘This is the way we wash our hands’, ‘Whoever you are, be noble;/whatever you do, do well’, ‘To do others’などがそれぞれ2回収載されている。

5. 結論および今後の課題

わが国における英詩の受容を明らかにすることを目的に、明治期に使われた代表的な英語教科書の分析を行

表4 英詩出現頻度

出現頻度	英詩タイトル	原作者
4	Little drops of water, Little grains of sand,	作者記述なし
3	Do your best, your very best,	作者記述なし
2	A Psalm of Life.	Henry Wadsworth Longfellow
	The Wind.	Christine G. Rossetti
	The Charge of the Light Brigade.	Alfred Tennyson
	To do others, as I would Early Rising Song of the American Eagle. Suppose. The Choice of Trades. This is the way we wash our hands, Whoever you are, be noble;/whatever you do, do well. Twinkle, twinkle little star,	作者記述なし

なった。当初、米国からの舶来英語教科書を利用していたことから、そこでは Longfellow が 16 回と大変多く取り上げられていた。次に Shakespeare, Tennyson が 6 回とつづく。つぎに Hemans が 5 回と多いが、この詩人は明治期には読まれていたが、今日では殆ど詩人の名前や作品について知られていない。本調査から Hemans が米国だけでなく、明治期の日本においても名が知られ、作品も英語学習者や英語科教員たちに鑑賞されていたことが明らかになった。明治 20 年代後期にわが国においても英語教科書が編纂されるようになったが、そこで扱われる詩人については、米国からの舶来英語教科書で扱われていた詩人たちと大きな差異は見られない。しかし、英詩を扱う量については極端に少ない。岡倉と熊本の教科書が共通して扱う詩人として Tennyson, Wordsworth, Longfellow の三詩人の名前が見られる。これは当時の日本人に関心のある外国詩人であったというだけでなく、英語学習者や英語科教員たちにはこれらの三詩人の名前や作品が知られていたものと考えられる。さらに、数は少なくとも当時の英語教科書編纂者が英語教科書に英詩を収載していたことは、オリジナルの英語教科書を翻刻したという観点に加えて、当時の英語教科書編纂者たちが十分に英語教育における英詩の役割について理解をしており、英語教育における教材としての英詩の重要性を認識していたからだと考えられる。

これまでの英語教授法の研究でも、訳註詩集の編纂においても、英語教科書の分析は行なわれてはきた。英詩受容史研究としては、アメリカ詩の受容研究において、一部の英語教科書を用いた分析は行なわれてきたが、イギリス詩の受容研究においては、英語教科書分析は行われてこなかった。

それはまた、英詩というものを低くみる英語教育界の態度と深く関わっているものと考えられる。

本研究で明らかにした明治期に使われた代表的な英語教科書の中に採用されている英詩は、これまでの英詩受容史研究が見落としてきた新しい一面を探り出す可能性が高いものと考えられる。しかし、これらの英詩と翻訳詩との関係性を見出すという今後に大きな課題を考えていく上でも、明治期の英語教科書が英詩普及に果たした役割を検討する必要がある。そして、今までの翻訳詩史研究において、国語教科書というメディアを対象とした書誌調査が行なわれてこなかったことから、この領域を加えることで新たな翻訳詩の発見の可能性を見つけていきたい。

参考文献

1. 有海久門. リーダーに現れたる英詩の研究. 1938, 292p.
2. 豊田實. 日本英学史の研究. 岩波書店, 1939, 736p.
3. 吉竹迪夫『英詩の理解』吾妻書房, 1964, 249p.
4. 研究社編. 日本の英学100年明治編. 研究社, 1968, 514p.
5. 研究社編. 日本の英学100年大正編. 研究社, 1968, 406p.
6. 手塚竜磨. 英学史の周辺. 吾妻書房, 1968, 441p.
7. 研究社編. 日本の英学100年昭和編. 研究社, 1969, 468p.
8. 櫻井役. 日本英語教育史稿. 文化評論出版, 1970, 278p.
9. 高梨健吉. ナショナルリーダーと国語読本. 英学史研究. 1970. No.2, p.36-37.
10. 吉武好孝. 英米文学の導入と日本の近代化. 英学史研究. 1972. No.5, p.1-21.
11. 吉武好孝. 英米文化の導入と日本の近代化. 英学史研究. 1972. No.5, p.195-199.
12. 手塚竜磨. 日本近代化の先駆者たち. 吾妻書房, 1975, 486p.
13. 佐渡谷重信. 日本近代文学の成立—アメリカ文学受容の比較文学的研究—上巻, 明治書院, 1977, 645p.
14. 佐渡谷重信. 日本近代文学の成立—アメリカ文学受容の比較文学的研究—下巻, 明治書院, 1977, 1217p.
15. 高梨健吉, 大村喜吉. 日本の英語教育史. 大修館書店, 1975, 288p.
16. 大村喜吉ほか編. 英語教育史資料第3巻 英語教科書の変遷. 東京法令出版, 1980, 530p.
17. 大村喜吉ほか編. 英語教育史資料第5巻 英語教育事典・年表. 東京法令出版, 1980, 479p.
18. 重久篤太郎. 明治文化と西洋人. 思文閣出版, 1987, 377p.
19. Takeda, Katz 'The Introduction of French Romanticism to Japan (1868-1923)' Romance Quarterly, 34 (4), 1987, pp.455-467.
20. 外山敏夫. 札幌農学校と英語教育: 英学史研究の視点から. 思文閣出版, 1992, 151p.
21. 高梨健吉, 出来成訓監修. 英語教科書名著選集第1巻～第30巻. 大空社, 1992-3,
22. 高梨健吉, 出来成訓. 英語教科書名著選集別巻英語

- 教科書の歴史と解題. 大空社, 1993, 235p.
23. 多賀徹哉. 分析研究『正則文部省英語讀本』その1. 中等教育研究紀要. 1994, Vol.34, p.105-112.
 24. 出来成訓. 日本英語教育史考. 東京法令出版, 1994, 643p.
 25. 亀井秀雄, 松本博編. 朝天虹ヲ吐クー志賀重昂『在札幌農學校第貳年期中日記』. 北海道大学図書刊行会, 1998, 461p.
 26. 丸山真男, 加藤周一. 翻訳と日本の近代. (岩波新書 580) 岩波書店, 1998, 189p.
 27. 川戸道昭. グリム・アンデルセン童話の発見 (上) —日本における近代児童文学の出発点. 日本古書通信. 2000. Vol.65, No.3, p.3-5.
 28. 川戸道昭. グリム・アンデルセン童話の発見 (下) —日本における近代児童文学の出発点. 日本古書通信. 2000. Vol.65, No.4, p.16-17.
 29. 大熊榮. 明治時代の英語教科書. つくばね: 筑波大学図書館報. Vol.27, No.4, 2002, p.4-6.
 30. 中村愛人ほか. 戦後英語教科書の量的分析. 日本教科教育学会誌. 2002, Vol.25, No.2, p.61-68.
 31. 水添祥多. 明治後期～大正中期の中学校における外国人教師の役割—山口県における外国人教師制度を事例として—. 教育学研究. 2002, Vol.69, No.4, p.66-77.
 32. 伊村元道. 日本の英語教育 200 年. 大修館書店. 2003, 309p.
 33. 首藤信一. 明治期の英語教科書. 別府大学短期大学部紀要. 2003, No.22, p.13-23.
 34. 濱口脩. 文学を利用した英語教育—高等学校英語教科書における英詩の活用—. 広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部. 2003, No. 52, p.97-105.
 35. 江利川春雄. 英語教科書から消えた文学. 英語教育. 2004, Oct. 臨時増刊, p.15-18.
 36. 小篠敏明, 江利川春雄編. 英語教科書の歴史的な研究. 辞游社, 2004, 178p.
 37. 清家佐保. 文学を教材にした授業実践 (中学). 英語教育. 2004, Oct. 臨時増刊, p.19-21.
 38. 新倉俊一. 英語で書かれた世界の名詩. 英語教育. 2004, Oct. 臨時増刊, p.50-52.
 39. 岡本匡史. 戦後中学校国語教科書翻訳文学教材一覧表 (小説・物語). 国語教育史研究. 2005, No.4, p.28-42.
 40. 安部規子. 修猷館の英語教育—明治時代を中心に—. 有明高専紀要. 2006, No.42, p.9-25.
 41. Okada, Akiko 'Reception of English Romanticism in Japan before World War II. ' *Keats and English Romanticism in Japan.*, Bern, Peter Lang 2006. pp.25-51.
 42. 滋賀大学附属図書館編. 近代日本教科書のあゆみ—明治期から現代まで—. サンライズ出版, 2006, 267p.
 43. 前野澄子. 明治期における英語教育の指導者たち. 鎌倉女子大学紀要. 2006, No.13, p.101-108.
 44. 安部規子. 修猷館の英語教育—明治・大正時代の教育課程・教材・教授法について—. 有明高専紀要. 2008, No.44, p.25-39.
 45. 中川かず子. ジェームス・サマーズ—日本研究者, 教育者としての再評価—. 北海学園大学人文論集. No.41, 2008, p.95-122.
 46. 丸山修. 中学校英語教科書における詩の扱い. 静岡大学教育学部研究報告. 教科教育学篇. 2008, No.39, p.171-183.
 47. 尾崎るみ. 『ニュー・ナショナル・リーダー』と日本の児童文学 (1) 明治期英語教科書と日本の児童文学 (8). 論叢児童文化. No.32, 2008, p.41-49.
 48. 尾崎るみ. 『ニュー・ナショナル・リーダー』と日本の児童文学 (2) 明治期英語教科書と日本の児童文学 (9). 論叢児童文化. No.33, 2008, p.41-49.
 49. 尾崎るみ. 『ニュー・ナショナル・リーダー』と日本の児童文学 (3) 明治期英語教科書と日本の児童文学 (10). 論叢児童文化. No.34, 2009, p.46-53.
 50. 尾崎るみ. 『ニュー・ナショナル・リーダー』と日本の児童文学 (4) 明治期英語教科書と日本の児童文学 (11). 論叢児童文化. No.35, 2009, p.39-45.
 51. 尾崎るみ. 『ニュー・ナショナル・リーダー』と日本の児童文学 (5) 明治期英語教科書と日本の児童文学 (12). 論叢児童文化. No.36, 2009, p.37-49.
 52. 尾崎るみ. 『ニュー・ナショナル・リーダー』と日本の児童文学 (6) 明治期英語教科書と日本の児童文学 (13). 論叢児童文化. No.37, 2009, p.47-57.
 53. 尾崎るみ. 『正則文部省英語讀本』と日本児童文学 (1) 明治期英語教科書と日本の児童文学 (14). 論叢児童文化. No.38, 2010, p.51-57.
 54. 福原麟太郎. 日本の英学. (日本叢書 51) 生活社, 31p. 出版年記載なし

注

1. Okada, Akiko "Reception of English Romanticism in Japan before World War II." *Keats and English Ro-*

- manticism in Japan.*, Bern, Peter Lang 2006. pp.25-51.
2. Takeda, Katz “The Introduction of French Romanticism to Japan (1868-1923)” *Romance Quarterly*, 34 (4), 1987, pp.455-467.
 3. 高梨健吉「英語教科書の復刻について」, 高梨健吉・出来成訓『英語教科書名著選集全 29 巻』大空社 1992-3. (この文は、各巻の巻頭に書かれている。)
- ### 引用文献
- 1 細谷俊夫ほか編. 新教育学大事典第一巻. 第一法規, 1990, 184p.
 - 2 大熊榮. 明治時代の英語教科書. つくばね: 筑波大学図書館報. Vol.27, No.4, 2002, p.4-6
 - 3 亀井秀雄, 松本博編. 朝天虹ヲ吐クー志賀重昂『在札幌農學校第貳年期中日記』. 北海道大学図書刊行会, 1998, p.141.
 - 4 同 p.329.
 - 5 同 p.330.
 - 6 同 p.330-331.
 - 7 川戸道昭. グリム・アンデルセン童話の発見 (下) —日本における近代児童文学の出発点. 日本古書通信. 2000. Vol.65, No.4, p.16-17.
 - 8 *ibid.*
 - 9 有海久門. リーダーに現れたる英詩の研究. 1938. p3.
 - 10 佐渡谷重信. 日本近代文学の成立—アメリカ文学受容の比較文学的研究—下巻, 明治書院, 1977, 1217p.
- (平成 22 年 3 月 26 日受付)
(平成 22 年 7 月 5 日採録)